

令和8年
冬

木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

OKOSSO

2026
Vol.
137

七宗町

飛騨川の流れが
生み出す自然の美

飛水峡

地域の歴史

御神木を伐り出した七宗山と里山の暮らし

地域の治水・利水

ホタル舞う神渕川流域と明治四十三年の
大洪水

歴史記録

大阪から開始した近代工法 第二編
淀川の粗朶沈床

研究資料

尾張平野の川と戦国のまち
京都大学大学院人間・環境学研究科
教授 山村亜希

ご し ん ぼく き ひ ち そ う ざ ん 御神木を伐り出した七宗山と 里山の暮らし



室兼林道を行く森林鉄道＜出典：林野庁ホームページ「森林鉄道」＞

昭和三十（一九五五）年、加茂郡上麻生村と武儀郡神渕村が合併して、七宗町ができました（当時は七宗村）。翌年さらに中麻生地区が編入。町制施行は昭和四十六年（ひちそう）。町名の「七宗（ひちそう）」は、西村の東北部に位置する七宗山から取られました。七宗山は飛騨川・神渕川・菅田川の三川に囲まれた山で、中に七つの高い峰があり、七宗山という名もこの七高峰が連なることから起こったそうです。江戸時代、七宗山の麓を取り巻く上麻生・神渕・菅田・金山（現・下呂市）、坂下東（現・白川町）の村々は「七宗根廻りの村」と呼ばれています。江戸時代の七宗山は尾張藩の御林山で、名古屋に近く運材の便が良かつたため「尾張様の御納戸」と呼ばれ保護されました。明治時代、帝室御料林となり、戦後は七宗国有林となりました。七宗町の面積の九割以上を森林が占め、地域の人々は古来、山や森林と密接な関わりを持つて暮らしてきました。

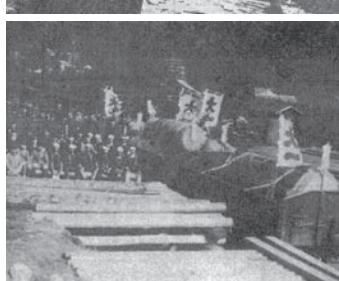
二・七宗山からの御神木 伐り出し

明治時代、七宗山は帝室御料林となり、戦後には七宗国有林になりました。その間も良材を供給し続けました。

伊勢神宮の第五十九回式年遷宮（昭和二十八年）の際、七宗山より御神木が伐り出されました。昭和十六（一九四一）年八月二日、この山の老名木が式年遷宮に用いられる御神木として選ばれ、九月五日に木を祓い清める神事が行われました。そして木を伐採し、翌年五月に山を下ろして室兼の洞ヶ井戸土場で神事をを行い、さらに運搬して上麻生小学校校庭で最後の神事を行った後、上麻生駅で貨車に積み込みました。御神木は鉄道で桑名駅まで運ばれました。このとき伐り出されたのは、樹齢四百数十年、胸の高さでの直径が五尺四寸（約一・六m）、枝下高（木の根元からその木の最も太くて長い枝までの長さ）が一丈二尺（約三・六m）の無節で直

元和元（一六一五）年、尾張徳川家初代義直が、家康から七宗山・木曽山を与えられました。そして元禄五（一六九二）年、上麻生村の百姓次郎右衛門が山廻りの役職を命ぜられます。やがて役名が山守と改められ、次郎右衛門は多々羅姓を名乗り、柿ヶ野に番所を構えました。山守の配下には山廻りがあり、山内の巡回、作業の指揮監督・現場事務等に従事しました。

七宗山で伐られた木材は、一本ずつ谷川を流して下らせ飛騨川の下麻生綱場まで運ばれました。そこで筏に組み上げられ、貯木場のあった名古屋の白鳥湊へと送られました。七宗山の良質な桧材はしばしば将軍家の息女の嫁ぎ先での住居（御守殿）の建材として使われました。

昭和16年の御神木伐り出し
＜出典：『年輪』第五号＞

大正時代までは以前と同じように、川の流れ

で大半が焼失した東京の明治神宮が復興された際、七宗山の木材が使われました（昭和三十年伐採開始）。明治時代、東京の両国橋の架け替えに七宗山の木材が使われたとも伝えられています。

「木馬」で木材を運搬
＜出典：『目で見る七宗町の歴史』＞

を利用して木材が運搬されていましたが、そのひとつであった島小屋から室兼までは、昭和十（一九三五）年に森林鉄道が建設され、昭和三十五（一九六〇）年まで使われました。この林道の途中に岩山が両側からせり出す難所「空ふさがり」があり、現在は絶景スポットとして町外から見学者が来る場所になっています。森林鉄道廃止後はトラック輸送に変わりました。

丸太を並べた「木馬道」の上を滑らせて運搬することが行われました。また七宗国有林の中心のひとつであった島小屋から室兼までは、昭和十（一九三五）年に森林鉄道が建設され、昭和三十五（一九六〇）年まで使われました。この林道の途中に岩山が両側からせり出す難所「空ふさがり」があり、現在は絶景スポットとして町外から見学者が来る場所になっています。森林鉄道廃止後はトラック輸送に変わりました。

町や関方面に荷車で出荷したり、仕入れに来る付木の行商人に売ったりしていました。

桧皮採取

伝統建築の屋根を葺くために使われる桧皮を採取する者が明治時代から神渕村におり、特に奥田・八日市に多かったです。経験者の話によると現在、奥田では桧皮採取を生業とする人は残っていないそうですが、かつては地区で五、六人が桧皮採取に携わっており、「カリコ」と呼ばれる足場の付いた網を使って、木を10、30mも登り、木製のヘラを使って表皮を剥いでいました。桧皮の注文は主に京都・岐阜にいる「屋根屋」から受けました。また、八日市在住の別の職人が語った記録によりますと、彼は全国各地を回り、社寺の建築現場近くの山で桧皮採取に従事していました。

ギーの中心になるまでは、炭や薪（割り木）を生産し売り出していました。以下では薪炭以外建築材だけではありませんでした。農業だけで生活するには耕地が狭かったこの地域では、人々は農閑期に山仕事にも従事しました。昭和三十年代の燃料革命で石油・天然ガスがエネル

ギーの中心になるまでは、炭や薪（割り木）を生産し売り出していました。以下では薪炭以外建築材だけではありませんでした。農業だけで生活するには耕地が狭かったこの地域では、人々は農閑期に山仕事にも従事しました。昭和三十年代の燃料革命で石油・天然ガスがエネル

大橋の付木

薪が燃料として使われていた頃、薪に着火する際に使われたのが、杉や桧の薄板の端に硫黄をついた「付木」です。この辺りでは大橋で作られる付木が有名でした。住民の回憶によれば、集落の約半数の家が農閑期の現金収入として付木を製造していました。秋の麦蒔きが終わると、夏に伐採しておいた桧を山から運び出し日陰で保管します。それを鋸（のこぎり）で五寸（約15cm）位の長さに切り落とし、一寸五分（約4.5cm）の定規を当てて割斧（のこぎり）で縦に小割りにしました。そして鉋（くわ）を逆さにしたような台で木片を前に突き出して削り、薄板を七枚ずつ藁（わら）で束ね、五束集めて大束にし、日当たりの良い場所で乾燥させました。次に硫黄に藍粉を混ぜて鍋（なべ）で溶かし、その硫黄を束の先端に付けました。製品は美濃



桧皮採取の際、木に登るために使用した道具「カリコ」



駅に集荷された「神渕松茸」<出典：『七宗 村勢要覧』（昭和40年発行）>



炭俵と炭俵編み機く「山で活躍した道具たち」展示より>

に運んでいました。その松茸も伊勢湾台風（昭和三十四年）の頃を境に生える量が減少し、今はほとんど生えなくなってしまったそうです。

四．里山の暮らしを今に伝える

伝統建築の屋根を葺くために使われる桧皮を採取する者が明治時代から神渕村におり、特に奥田・八日市に多かったです。経験者の話によると現在、奥田では桧皮採取を生業とする人は残っていないそうですが、かつては地区で五、六人が桧皮採取に携わっており、「カリコ」と呼ばれる足場の付いた網を使って、木を10、30mも登り、木製のヘラを使って表皮を剥いでいました。桧皮の注文は主に京都・岐阜にいる「屋根屋」から受けました。また、八日市在住の別の職人が語った記録によりますと、彼は全国各地を回り、社寺の建築現場近くの山で桧皮採取に従事していました。

かつてこの地域の山々にはアカマツが多く、秋になると松茸が生え、香りの良さから「神渕松茸」として知られています。経験者からの聞き取りでは、数軒合わせて一日で数十kg取つたが、一日で一枚敷いた庭に山積みされるほど取れたという話です。高山本線には「松茸列車」が運行され、東京や名古屋方面に出荷するために松茸が上麻生駅に集められ、構内にはその香りが充満していたそうです。列車の出発時間に合わせるため朝から急いで松茸を取り、駅

に発足した「ふる里研究会」で、町に伝わる風俗や習慣などの保存・記録活動が行われていました。平成三（一九九一）年には「民俗資料保存会」が結成され、民具の収集保存が行われるようになりました。

七宗町保存古民具特別展示「山で活躍した道具たち」と題した最新の展示では、山仕事に欠かせない鋸や斧、なた、炭俵編み機、炭俵、背板（背負子）などを解説パネルとともに紹介しています。見るだけでなく、道具の仕組みが分かる手製の模型を来場者に動かしてもらったり、実際に道具を持って重さを確認してもらつた

■参考文献

『七宗町史 通史編』 一九九三年
『目で見る七宗町の歴史』 七宗町 一九九四年

『七宗探訪』 『しゃくなげ』 七宗町教育委員会
『年輪』 七宗町福寿会 一九九三年

『（一九八一年創刊当時は七宗町長寿会）七宗山御山守多々羅家と御山廻り役人』
『神渕村八十年史』 神渕村教育委員会
『七宗山御山守多々羅家と御山廻り役人』
『白川町誌』 白川町 一九六八年
『七宗山から伊勢神宮御造営の御神木の搬出』 『年輪』 第五号 七宗町長寿会 一九八五年

『七宗山』 長谷川真吾一 『年輪』 第五号
『七宗町長寿会 一九八五年』
『我が部落の特産物』 長尾勲
『年輪』 第三号 七宗町長寿会 一九八三年
『檜皮師』 『古稀記念誌 七〇の綴方』
『松茸』 松山広行 『年輪』 第十一号
『七宗町老人クラブ連合会』 一九九一年



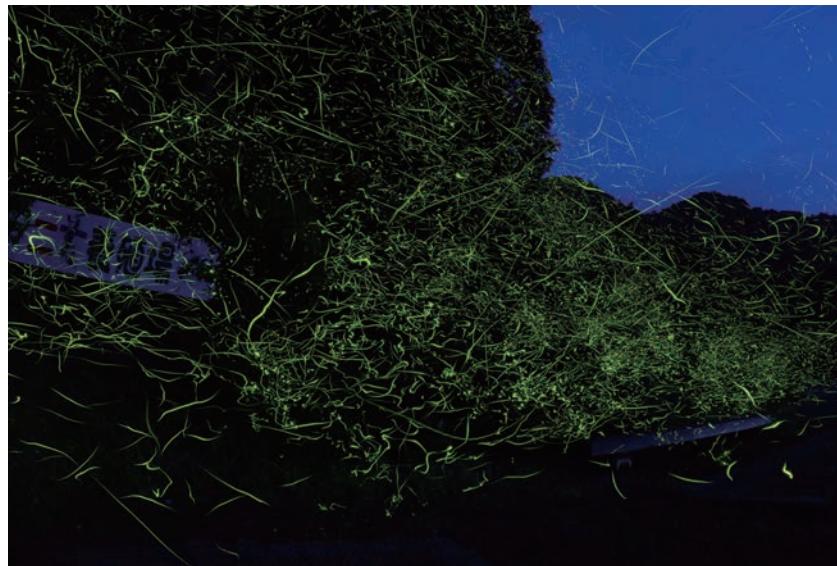
七宗町保存古民具特別展示「山で活躍した道具たち」の展示風景

たり、会員の想いと工夫が詰まつた体験型の展示です。令和七年（二〇二五年）十二月七日～翌八年二月二十日まで、七宗町中麻生

の日本最古の石博物館にて開催されています。同会は、小学生を対象にした体験学習にも力を入れ、「脱穀・精米体験」や「糸車体験」などを開催しています。脱穀・精米体験では、脱穀・唐箕（くわ）での選別、木臼（もみ臼）での粉摺（もみすり）など、昔の流れを忠実に再現。薪を使って火をおこし、釜で炊飯し、おむすびを作つて食べる学習（フログラン）が子どもたちに大好評で、今後も学校からの要望に応じて開催予定だそうです。

同会は、小学生を対象にした体験学習にも力を入れ、「脱穀・精米体験」や「糸車体験」などを開催しています。脱穀・精米体験では、脱穀・唐箕（くわ）での選別、木臼（もみ臼）での粉摺（もみすり）など、昔の流れを忠実に再現。薪を使って火をおこし、釜で炊飯し、おむすびを作つて食べる学習（フログラン）が子どもたちに大好評で、今後も学校からの要望に応じて開催予定だそうです。

かぶち ホタル舞う神渕川流域と 明治四十三年の大洪水



七宗町葉津のホタル＜提供：七宗町＞

明治四十三（一九一〇）年九月三日夕刻、七宗山の麓の村々を豪雨が襲い、神渕川流域では大洪水となりました。大きな被害を受けた当時の神渕村では死者が四〇名に上りました。一世紀以上も前の出来事のため、今、知りうる情報には限りがありますが、被災者の証言の記録から水害の様子を窺い知ることができます。また災害後、村人を励ますために作られた歌や活気を呼び戻すため劇場が建設された事実からは復興へと奮起する人々の気概を感じられます。

七宗町を流れる主要な河川は、飛騨川とその支流の神渕川です。神渕川は長さ約一二・八kmで、いくつもの支流を持ち、複雑な流路を示します。最後は飛騨川に合流します。神渕川水系の水は七宗町に降った雨のみが源になつており、神渕川は七宗町固有の河川だと言えます。

二・神渕川流域の地形・自然

神渕川流域にある、川の流れの作用でできた地形を見てみますと、まず万場から上中切にかけて、神渕川より少し高い位置に、平成二十五（二〇一三）年より太陽光発電所「ソーラーパークひわせいじ」が運転されている平坦な地形が広がっています。この場所は、かつて神渕川の水量が多かつた時代に多量の土砂が堆積してできた「河岸段丘」です。

神渕川流域には川が大きく曲がつて流れる、「蛇行」が多く見られます。室兼から上大橋にかけての神渕川や支流葉津川の流れが、典型的な蛇行河川と言えるそうです。下大橋では小高い丘を圍むように南に膨らんで神渕川が流れていますが、これは「還流丘陵」と呼ばれる地形です。かつて（約四万年前）は神渕川がこの丘の北側を流れており、その後に丘の南側を蛇行するようになつたため、この箇所が川の侵食から取り残されました。

一・はじめに

神渕川流域の東側の七宗山地域では「コルジュー」（フランス語で「喉」の意味）地形が見られます。この地域一帯が相対的に隆起して、急激に川によって下刻侵食されたため、狭くて急な崖が形成されました。

神渕川は水量が比較的豊かで、ネコギギ（国の天然記念物）やアジメドジョウのよう、環境省レッドリストに掲載され絶滅が危惧されている魚が生息できる環境を残しています。

神渕川流域では夏になると、ホタルを見ることがあります。神渕川、支流の間見川、葛屋川、葉津川のホタルが知られています。葉津ではホタルの幼虫の餌となる巻貝であるカワニナの養殖場を地区の有志が作り環境整備した結果、木タラの観賞スポットになりました。

林道が整備される以前、山で伐採した木材を川に流して運びましたが、川の中に岩が突き出てしまつたため、その場所に「修羅」を組みました。修羅は半月状の溝にならのように丸太を並べたもので、その中に木材を滑らせました。神渕川の上麻生小学校から百m程上流のところに当たる「さんまいすら」と呼ばれる場所は、岩が多く、川が堰のようになつており、そこでは通常一枚設置する修羅を三枚組む必要がありました。そこから「さんまいすら（三枚修羅）」という地名が付いたのです。



神渕川水系 <『七宗町史 通史編』の図を一部加工>



万場から上中切にかけての河岸段丘

「さんまいすら（三枚修羅）」
<出典:『年輪』第七号>

三・明治四十三年の大洪水

神渕川は、多くの場所で平坦な土地を緩やかに流れ、河床は高くなつており、ひとたび大雨が降ると、支流の水を集め増水する特徴があります。そのために引き起こされた水害が「明治四十三年の大洪水」でした。



「明治四十三年の大洪水」の被災光景
出典:『目で見る七宗町の歴史』

上麻生・坂之東・中之保・益田郡金山・菅田・下原の各地で、100mmを超える激しい雨が降りました。神渕川は午後七時頃、瞬く間に増水、氾濫しました。当時の神渕村では溺死者三六名

土砂に埋もれた者四名、家屋の流失四一軒、全壊一九軒と大きな被害を受け、その被害は寺洞の下市場と、下市場と接した大塚の一部に集中していました。家々が流された時はすでに暗闇の中で、隣家の異変する氣付かないほどで、下市場が激流に襲われて川原と化したことを村の人々が知ったのは翌朝だったそうです。

被災者一人が昭和二十八(一九五三)年、神渕小学校で行った講演を『神渕村八十年史』が記録しています。当時三十四歳で、大塚に住んでいた福井朝太郎氏は洪水で母親を亡くしました。その日、午後一時頃から雨が降り出していましたが、「四時半か五時頃すばらしい雨が降り田の

水が浮かばり縁の下へ水が入りました」と語っています。以下は講演録をそのまま引用。以下同様)。氏は怖がる子供ら

を高い場所にある家に預け、身重な体の妻も車を逃げさせます。続いて母親を逃そうとした頃には「ぶつける様ないたい雨」になっていました。逃げ途中で倒れてしまった母親を家へ連れ戻しました。

二人で物を一階に上げていると家に「じんじん水が入り」一階に逃げますが、下は水で一杯になりました。「大きい木が流れて来てドカンドカンドと折り、みきみきと云う。家は弱つてモリモリと云う、いよいよ流されると思うと、おはあさんは気が變り、「おれは出れないお前は大事な人だから出よ。」「早く早く出よ。」と云われたので、屋根に上り風窓より出た。出で一・三歩屋根の上を歩くともう屋根上まで水がついていた。そこで濁流に飛び込みますがうまく泳げず、諦めかけていると、稻穂が足に触れた気がしました。思い切つて立つてみると立つことができました。真っ暗でしたが、どうも「天神様」の下の場所のようでした。波は大きく一面が水ばかりで、大塚・大橋は大波原(ママ)であった。ああ天神様やおつかさんのお蔭で助かつたと思った。大声を張り上げていると、灯を持ってこられたと叫ぶ声が聞こえたので、そちらに歩いてゆき、大塚の四名の者に助けられました。氏は翌日から母親を懸命に探し、一日かけて笠松まで探し回りましたが、見つかりませんでした。

講演の最後を福井朝太郎氏はこう締めくっています。「下川原は両側全部流れてもとの薬屋一軒が残つた。それは大きい樹木が立つておりこたえていたらしい。川に入つて助かつたのは私一人です。」

七宗町長寿会発行『年輪』創刊号に掲載された龜山寿一氏の文章では、洪水時に小学四年生だった氏が、洪水の様子を書き留めています。「溺死者の遺体は、全部までは見付けられぬまま年も暮れようとして龍門寺に於て合同葬が行われ、二名の同級生を失った四年生百名の代表として、山岡鷹助君が弔辞を読みながら万感胸に迫つてその場へ泣きくすれ、同級生らも声をあげて泣

き出し、担任の長尾石松先生が山岡を抱き上げて席へ戻られた」という切ないエピソードも残されています。

『神渕村八十年史』には、当村民の歌った水害の歌「神渕大洪水の歌」が載っています。この歌は住民の間で長く記憶されていました。

一、時は明治の四十三 九月三日のその夕

ふり続きたる大雨に 天をも浸す大洪水

二、山を崩し谷を埋め 我村里を川と化し

家居を破り命を奪つも悲し四十人

三、道に背かぬ我村の 村人などて幸運を

むじに加うる天道の しもとの鞭はよも

あひ

四、さはさりながらせの中は 田にも晴あり

雲りあり

八、げに賣きは人々の 心の底の覚悟のみ

心の底の覚悟のみ 反よめんいささかれば

よく用ふれば禍も 変じて幸となゆむかし

中略

ハ、げに賣きは人々の 心の底の覚悟のみ

心の底の覚悟のみ 反よめんいささかれば

よく用ふれば禍も 変じて幸となゆむかし

中略

神渕村の水害の様子は、現在の東洋大学の創立者で哲学者・教育家であった井上円了(一八五八~一九一九年)によっても書き残されています。彼は明治四十三(一九一〇)年八月二十六日から十月十七日にかけて、岐阜県美濃地方を中心で講演旅行をしました。この時の紀行文の九月三日の項に「この日、武儀郡神渕地方に未嘗有の水災あり」と書かれています。そして井上は実際に九月二十四日、益田郡西村から武儀郡金山町に入り、同じく水害の被害を受けている同町役場を慰問した後、徒步で神渕村に入りました。「前後の駅路崩壊して車馬通じ難し。これより出する小流、暴溢して民家を洗い去り、人畜死傷多し」と記しています。彼自身が作った慰問の漢詩も残されています。

その夜、井上は神渕小学校で「水害慰問演説」をします。校長の中島松太郎が講演会の幹事でした。龍門寺に宿泊し、翌朝には役場を訪問します。水害被災地を見て回り、「数十家全滅の跡



下市場橋の脇に立つ慰靈碑

■参考文献

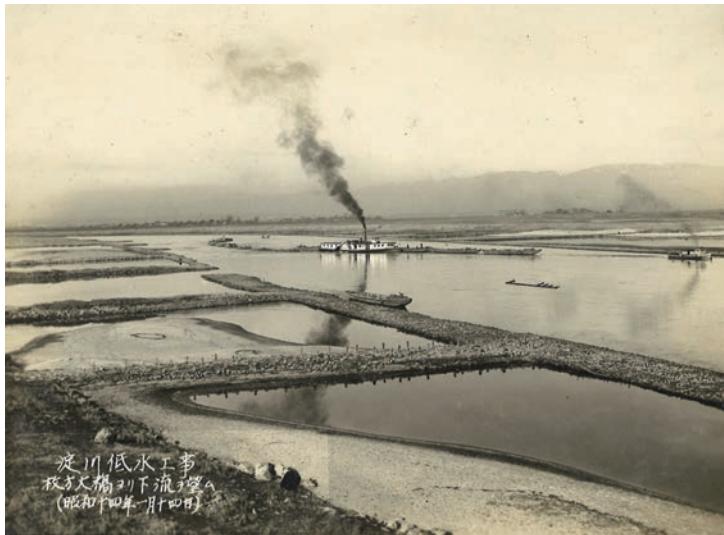
『七宗町史 通史編』 一九九三年
『目で見る七宗町の歴史』 七宗町 一九九四年

■参考文献
『七宗探訪』
『しゃくなげ』 七宗町教育委員会
『守りたい加茂の豊かな自然』 美濃加茂市
・坂町・富加町・川辺町・七宗町・
八百津町・白川町・東白川村 二〇一九年

『年輪』 七宗町福寿会
『年輪』 (一九八一年創刊当時は七宗町長寿会)
『神渕村八十年史』 神渕村教育委員会
一九五五年

「ほつき星は矢張り兎兆だった」 龜山寿一
『年輪』創刊号 七宗町長寿会 一九八一年
『神富座の由来』 龜山雄一『年輪』第十七号
七宗町老人クラブ連合会
『美濃国東部紀行』 井上円了選集 第13巻
東洋大学 一九九七年

大阪から開始した近代工法 第二編 淀川の粗朧沈床



淀川に設置された粗朶水制(ケレッップ水制、手前)と遡行する蒸気船(枚方大橋より下流方向を望む。昭和14年) <淀川河川事務所所蔵>

前編「オランダの土木技術書と流出土砂対策」で述べた通り、オランダ人技術者ドールンの明治政府への提言に従って、明治六（一八七三）年九月にエッシャーとテ・レイケが、同年十一月にチッセンが大阪築港計画のために招請された。しかし彼らは築港計画よりも、まずは淀川上流域での砂防対策が先決であると結論した。淀川の舟運のためには蒸気船が大阪・伏見間を航行できるようにする低水路工事を提言した。

本編では、その低水路工事で導入され、全国各地で施工される嚆矢となった淀川の粗朶沈床工の設置経緯を述べた後、木曽三川での粗朶水制についても触れよう。

前編 「オランダの土木技術書と流出土砂対策」で述べた通り、オランダ人技術者ドールンの明治政府への提言に従つて、明治六（一八七三）年九月にエッシャーとテ・レイケが、同年十一月にチッセンが大阪築港計画のために招請された。しかし彼らは築港計画よりも、まずは淀川上流域での砂防対策が先決であると結論した。淀川の舟運のためには蒸気船が大阪・伏見間を航行できるようにする低水路工事を提言した。

一、粗朶水制とは

「水制」とは、岸への水流の激突を防いだり、水流の方向を軽じたり、また水深や流路幅を維持するために川中で設置するものである。

位置に沈める。
粗朶沈床は、粗朶の柔軟性や屈曲性によって、沈床上部に設置した工作物の不等沈下を防止する効能があり、また、川底や川岸の洗掘に追従できる柔軟性を持っており、根固工（河床洗掘を防止する工法）等に用いられる。

「水制」とば、岸への水流の激突を防いだり、水流の方向を転じたり、また水深や流路幅を維持するため川中に設置するものである。

わが国で用いられてきた水制は、流水が通過する杭を用いた「杭出し水制」(透過性)と「刎ね」・「水刎ね」・「刎出し」等と呼称された不透過水制である。木曽三川では不透過水制の「水刎ね」を、築造する材料(土、石、木)に拘わらず、堤防から斜め下流方に延びている形状に因み、「猿尾」(さるお)とも呼称している。明治時代にオランダ技術者がわが国に紹介し、設置されたようになつた不透過水制の一種が、本編で取り上げる粗朶水制(ケレップ水制)である。

(高水敷に) なり、平常時の低水路が舟運に使用されるのである。

粗朶とは、直徑数cm程度の細い木の枝を束ねてしたものである。
粗朶沈床は、粗朶を用いて次のような工程で設置される。

なお粗采水制はケレップ水制とも呼ばれる。
は幹部水制だけである。
水路の流れ方向に沿つて設ける「頭部水制」(頭部はなぶ)の一一種類がある。木曽三川で
ける「幹部水制」(横側、横工とも呼ぶ)と低水
粗采水制の設置状況は流れにほぼ直角に設置

ケレップはオランダ語の水制「水道」の日本語読みで、「ケレップ水制」は同じ意味の語を重ねた言葉（二重）表現である。

カーバー (11 cm) と四 (4 cm) の乗 (連繋) にかかる。

江戸時代の粗朶沈床

② 粗朶よりも強靱性がある強靱な耐候性（構造部材）と連続して格子形の枠を組む（トス）。

〔日本水制工論〕によれば、粗糲水制の原井と
言ふる柴枝による護岸工法は、元王朝（一一七一
—一二六八）の時代に歐洲から中國へ伝わった

③その上に粗朶を三層に敷

也内
請
)年
m。

④敷いた粗朶の上に同じ構

國役普請
(1871) 年
さ4.4m。

造の格子形の枠（上格子と下格子）を置いて、上下

セントラル
30)年の
。明治4
32m、高
。



⑤ 小に抗い（監禁、禁錮、禁錮）を結束する。

原浄化工事の工事現場で、工事員が木製の構造物の上に立って、手で土を運んでいます。背景には緑豊かな木々が見えます。

⑥上部に石を積んで所定の
　　(ハ木(ハ木)、木(木)、木(木)
　　を固定する杭(ハシ)などを用
　　いて固定する。

岐阜県各務原浄化センターの敷地内
ある前渡猿尾
長さは、寛永7(1630)年の国役普請
で64間半(約117m)。明治4(1871)年
の図からは、長さ182m、高さ4.4m。
現在は286mである。





岐阜県各務原浄化センターの敷地内
にある前渡猿尾
長さは、寛永7(1630)年の国役普請
で64間半(約117m)。明治4(1871)年
の図からは、長さ182m、高さ4.4m。
現在は286mである。



作成中の粗朶沈床 <提供:信濃川下流河川事務所>

よりである。

江戸時代すでにわが国では、仙台藩（伊達藩）が寛政・享和年間（一七八九～一八〇四年）に、北上川筋下流で堤防から突き出した水制を設置する際、粗朶を筏状に組み、これを浮丸太で浮かべて所定の位置に導き、順次丸太を除きながら大石を投じて沈め、平水面上三、四尺（約一メートル・二メートル）の高さの水制を築造した。しかし、この工法がわが国で考案されたのか、中国から伝わったのか、慶長十八（一六一三）年の仙台藩による遣欧使節団が伝えたのかは不明である。

二・わが国最初の粗朶水制工

淀川将基島での試験施工

明治六（一八七三）年にオランダから来日したエッシャー、チッセン、テ・レイケの三工師は、同年十一月に開始した宇治川から河口に至る淀川全川と支川での測量を翌七（一八七四）年十一月に應終らせ、引き続き淀川改修計画の立案に取り掛かった。

この改修計画は、京都の外港である伏見の観月橋から大阪天満橋までの約四〇・六キロ間に粗朶水制工（ケレップ水制）を三九三ヶ所施工して、河道内に平常時の流水が流れる低水路を形成する計画であった。つまり、粗朶水制を設置して、五〇〇～一、〇〇〇mの川幅内に幅一二〇m程の低水路を形成し、四〇cm程度であった水深を一・五m程にして舟運を可能にし、堤防の危険箇所には防護工事を施す計画であった。

江戸川での低水路工事

明治六（一八七三）年にオランダから来日したエッシャー、チッセン、テ・レイケの三工師は、同年十一月に開始した宇治川から河口に至る淀川全川と支川での測量を翌七（一八七四）年十一月に應終らせ、引き続き淀川改修計画の立案に取り掛かった。

この改修計画は、京都の外港である伏見の観月橋から大阪天満橋までの約四〇・六キロ間に粗朶水制工（ケレップ水制）を三九三ヶ所施工して、河道内に平常時の流水が流れる低水路を形成する計画であった。つまり、粗朶水制を設置して、五〇〇～一、〇〇〇mの川幅内に幅一二〇m程の低水路を形成し、四〇cm程度であった水深を一・五m程にして舟運を可能にし、堤防の危険箇所には防護工事を施す計画であった。

淀川での粗朶水制工が、わが国で最初の施工であった。その効能を確認するため、水勢の激衝地點である淀川左岸将基島地先（天満橋上流三〇〇m網島町付近）を選び、明治七（一八七四）年十月下旬にチッセンとテ・レイケの指導で、三基の粗朶水制が試験施工された。これが、淀川修築工事の開始である。

『治水総論』に記されたケレップ水制

オランダの河川工学の知識や近代工法をわが国に紹介した本として前編で紹介した、明治六（一八七三）年一月初旬にドールンが大蔵省土木寮に提出した『治水総論』は、河川工学の基本概念である「流域や集水域」「水面勾配」「平均流速・流量」等について説明した後、具体的に「水制ね」（ケレップ水制）の設置計画図を示し、その製作方法について、粗朶水制間の距離を「水制ね」長さの凡そ一・五倍にする」ことを述べる。

そして長さ約三〇mの粗朶水制一基を水深一・二m程の川に設置する際の概算費用をオランダの価格表で算出し、日本では木や石が安いのでもっと安くなると結論する。最後に堤防の幅や高さ等について記している。

たが、資料はあまり残っていないようである。その後明治十（一八七七）年一月に、ドールンによる設置計画図に基づき、水制三基が設置された。内一基の設置位置は不明だが、水制二基と護岸工事が古ヶ崎地先から利根川直轄工事として開始された。

その他、江戸川沿いの東京府・千葉県・埼玉県で水制・護岸工事が工手ヴェステルヴィルの指導で施工されたが、やはり工事記録はほとんど残っていない。

淀川修築工事

明治七（一八七四）年十一月、淀川改修計画が土木寮に提出され、翌年五月に決裁となった。工事は翌六月からエッシャー、テ・レイケ両工師の指導のもとに着手された。明治九（一八七六）年

末にエッシャー、チッセンは東京に移り、淀川の改修と水源の砂防など一切の工事はテ・レイケの手にゆだねられた。粗朶工によるケレップ水制や護岸工を中心に、工事は順次全区域に進められたが、工事が進捗するにつれ、計画通り水深一・五mの航路ができあがった。明治二十一（一八八八年）度に、当初計画の工事のうち守口以西の下流を残して一段落した。

引き続き既成工事の修繕が行われたが、明治二十九（一八九六）年度に淀川の本格的な治水事業となる「淀川改良工事」の施行が決定したため、同年度で修繕工事は打ち切られた。

見つかった桂川河川敷の「水制」

蒸気船の運行

小型蒸気船は明治三（一八七〇）年に建造されたようだ。明治五（一八七一）年には淀川で二隻の外輪式小型蒸気船が運行した。ちなみに利根川の外輪式蒸気船は明治四（一八七二）年に就航している。

淀川修築工事の成果が上がってきた明治十代、粗朶水制（ケレップ水制）の設置で蛇行した低水路が形成されるにつれ、河底勾配の低下

淀川のケレップ水制は一九七〇年代以降、河川改修工事でその多くが姿を消したが、ケレップ水制が土砂を堆積させて形成した「ワンド」と呼ばれる水域が残っており、大阪市旭区の城北公園付近の城北ワンド群等が知られている。一方、工事等で埋もれたケレップ水制が近年、考古学調査によって発見された例もある。



ドールンによる松戸の江戸川での「水制ね」試験低水路設置図（『治水総論』より。一部加筆）
<出典: 土木学会附属土木図書館デジタルアーカイブス>



淀川での粗朶水制工の作業状況（昭和32年、十三大橋付近）
<淀川河川事務所所蔵>



木津川・桂川合流部の水制護岸の設計図（木津川河床遺跡第22次発掘調査報告）の図を加工



積荷船を曳いている淀川の外輪蒸気船（昭和14年撮影）
<淀川河川事務所所蔵>

に伴つて流水速度が緩くなり、蒸気船が次々と就航した。明治二十（一八八七）年には、蒸気船は一三隻を数えた。明治九（一八七六）年に大阪と京都を結ぶ鉄道が開通していたにも拘わらず、淀川舟運は黄金時代を迎えていた。

しかし明治四十三（一九一〇）年、淀川左岸に京阪電鉄が開通すると旅客輸送は鉄道に移った。一方で貨物輸送である蒸気船による取扱船は、大正を経て昭和三十年代半ばまでその役割を長らえた。曳船は、近世以来淀川の貨客輸送を担つていた和船を、蒸気船が曳くものであった。

オランダ技術に対する批判と普及

淀川に設置された粗采水工の結果が良好であつたため、その評判は全国に知れたり、粗采水工指導のため淀川から熟練者が派遣された。また粗采工修得のため各地から淀川に実習に来る者が絶えなかつた。一方でこの工法に対する批判も一時期見られた。

『日本水制工論』は粗采沈床工について、「盛んに歐米の文物に心酔し、為に本邦古来の優秀なる工法も、全く顧みられずして、只々新奇を衒ひたりしが如し。」「水流の緩急を究めずして、広く各地の大河に之を応用し、『中略』優良なる工法なりしに拘はらず、往々失敗に陥り」と記している。

上記の好例として天竜川の事例を挙げる。明

治二十（一八八七）年に長野県の天竜川と千曲川の二ヶ所で試験施工が行われたが、下川路村（現飯田市大字川路）の天竜川河岸に設置したケレッブ水制が流失した。

『川路村水防史』は試験施工の結果について、「緩流急流の河相の辨へも、選択もなく、凡て外国式を最上と看做して施工した粗采工は眞實に適當でなかつた」と述べている。

したがいに適用外の急流河川にまで粗采水制を設置したため、一時期、オランダ技術に対する批判も生じたが、粗采水制は緩勾配の砂利河川の水制工法として広く普及した。

最後に、粗采水制（ケレッブ水制）の木曽三川への設置について見てみよう。

三・木曽三川のケレッブ水制

木曽三川治水対策の要望

木曽三川の抜本的な治水対策の要望は明治元年に始まっている。明治元（一八六八）年十一月に笠松県知事長谷部恕連は、河口部の開削や木曽三川分流等を政府に建議し、明治四（一八七一）年には、名古屋藩大参事の丹羽賢は「外国人を使つて從来と一変した体制で治水工事に當たれ」と政府に要望している。

明治七（一八七四）年に淀川で初めて施工されたケレッブ水制の効能は、治水工事を望む各地の注目を集めた。明治十（一八七七）年十月、三重県令岩村定高と愛知県令安場保和は連名で、オランダ技術者による木曽三川の調査を内務省に要請した。

明治十一（一八七八）年一月～三月、テ・レイケは木曽三川の調査に着手した。テ・レイケは分派・合流で網目状の三川の流れを、独立した個別の流れに分流すると共に、淀川と同様に、木曽・長良・揖斐川に粗采水制によつて「低水路」を設置する計画を立てた。

粗采水制の設置開始

淀川の河道改修と上流域からの土砂流出に取組んでいたテ・レイケは、明治十一（一八七八）年には九頭竜川河口の三国港突堤（通称エッセル堤）工事と木曽三川での粗采水制設置に関わつた。まさに「席の暖まる暇もない」仕事の連続であった。

同十一（一八七八）年四月に木曽三川流域の現地調査書『木曽川下流概説書』を内務省に提出したテ・レイケは、帰国する設計者エッシャーに

「『参考文献

『テ・レイケとその業績』 建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所 一九八七年
『上林好之博士収集資料概要書』 二〇〇九年
『明治以後本邦土木と外人』 社団法人土木学会 一九四二年
『日本水制工論』 真田秀吉 岩波書店 一九三二年
『淀川百年史』 建設省近畿地方建設局 一九七四年
『利根川百年史』 建設省関東地方建設局 一九八七年
『岐阜県治水史』 下巻 岐阜県 一九五三年
『川路村水防史』 代田豊太郎・牧内武司編
『川路村水害予防組合』 一九三六年
『木津川河床遺跡第22次発掘調査報告』 一九三六年
『京都府遺跡調査報告集』 第155冊
公益財団法人京都府理蔵文化財
『調査研究センター』 一〇一三年
『木津川河床遺跡第22次発掘調査報告』 一九三六年
『利根川・淀川を中心』 松浦茂樹
『水利科学』 No. 226 一九九五年

を設置している。なお三国港突堤工事は一応明治十三（一八八〇）年十一月に完了した。

テ・レイケは木曽川改修工事の計画書の作成を明治十七（一八八四）年に命じられるのであるが、前述の木曽三川の調査を開始した明治十一（一八七八）年二月には早くも、内務省土木寮（明治七年に大蔵省から移管）の指示で、ケレッブ水制の設置準備が行われている。

土木局出張所に準備されたケレッブ水制の材料は、現羽島市正木町三ツ柳（濃尾大橋右岸下流）から現海津町成戸（改修工事で長良川右岸に変更）までの木曽川右岸用に用いる粗采二〇万束、帶梢七千束、杭木一万本であった。

同年四月半ば成戸村で粗采七万四千束を用いて、ケレッブ水制工事が着工された。残りの粗采（二一万六千束）等は正木町三ツ柳から成戸上流までの間に施工したようである。以後、粗采沈床は木曽・長良・揖斐三川の各地で施工された。

表1は、木曽三川各地の村で開始した明治十一（一八七八）年十一月～明治十五（一八八二）年までの粗采沈床工事の着工又は竣工年である。

木曽三川に最終的に設置された水制数は表2である。この調査区間は、馬飼大橋下流1km～東名阪木曽川橋までの1.5km区間である。

木曽三川に設置された水制数は表2である。この調査区間は、馬飼大橋下流1km～東名阪木曽川橋までの1.5km区間である。

木曽川では未施工数（四ヶ所）に比べて計画外施工数（二〇ヶ所）が多く、水制本数が改修計画時以降に新たに増えたことを示している。

現在、木曽川左岸の水制は、平成初期に行われた高水敷工事（アーチケット工法）で多く埋没したが、今なお残る木曽川右岸側の水制群は豊かな河川空間を創出しており、水生生物や植生、やひい小動物等の良好な環境となつてている。

川では未施工数（四ヶ所）に比べて計画外施工数（二〇ヶ所）が多く、水制本数が改修計画時以降に新たに増えたことを示している。

現在、木曽川と長良川の未施工数と計画外の施工数は余りかけ離れていない。ところが、揖斐川施工数は余りかけ離れていない。

表2 明治改修による施工水制数
<『KISSO』vol. 98掲載の表を再構成>

着工・竣工年	揖斐川筋	長良川筋	木曽川筋
明治11年12月 (着工)	安八郡龜崎村・平村 石津郡東駒鹿野村・外安村 大野郡杉野村		海西郡成戸村
明治13年2月 (着工)	安八郡福東村		羽栗郡笠松村・田代村
明治15年3月 (竣工)	安八郡南波村・福東村	安八郡森部村(3月 着工、12月竣工)	中島郡八神村
同年4月 (着工)		厚見郡鏡島村 (9月竣工)	

木曽川右岸のケレッブ水制

平面図からは合計三九

七基、大正二（一九一

三）年の木曽長良揖斐

三川改修竣竣工図からは

四〇二基であり、木曽

川全体では四九基は

何らかの原因で施工さ

れず、五四基は計画外

の箇所に施工された。

木曽川と長良川の未

施工数と計画外の施工

数は余りかけ離れてい

ない。ところが、揖斐

川では未施工数（四ヶ所）に比べて計画外施工数

（二〇ヶ所）が多く、水制本数が改修計画時以降

に新たに増えたことを示している。

現在、木曽川左岸側の水制群は

豊かな河川空間を創出しており、水生生物や植

生、やひい小動物等の良好な環境となつている。

川では未施工数（四ヶ所）に比べて計画外施工数

（二〇ヶ所）が多く、水制本数が改修計画時以降

に新たに増えたことを示している。

現在、木曽川と長良川の未

施工数と計画外の施工

数は余りかけ離れてい

ない。ところが、揖斐

川では未施工数（四ヶ所）に比べて計画外施工数

（二〇ヶ所）が多く、水制本数が改修計画時以降

尾張平野の川と戦国のまち

京都大学大学院人間・環境学研究科

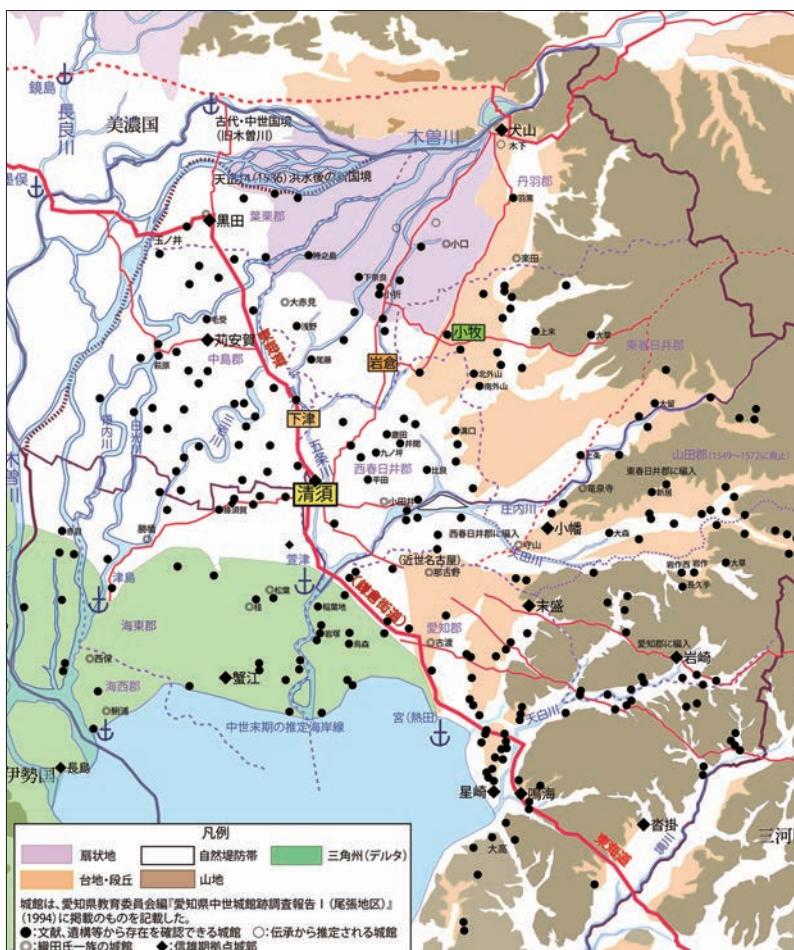
教授 山村亜希



河道の一部が池状に残る天王川公園（筆者撮影）

江戸時代以前、尾張平野（濃尾平野の木曽川よりも東側）には木曽川の分派川がいくつも流下していました。これらの分派川は勾配の緩い土地を蛇行して流れ、頻繁に氾濫して肥沃な土壤をもたらすとともに、自然堤防と呼ばれる微高地を形成しました。このような場所を地形区分で「自然堤防帯」と呼びます。

戦国時代の尾張平野の自然堤防帯では、守護・戦国大名が拠点を置く城郭のもとで城下町が発達し、また川湊を中心として港町ができました。ここでは、そうした港町の一つである津島を取り上げ、河川や自然堤防と、その町並みの形成・発展との関係を見てみます。尾張の戦国都市としての津島の立地とかたちは、城下町の清須とも共通していました。



一・尾張平野の地形と河川

濃尾平野は、木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）が形成する日本有数の規模の沖積平原である。濃尾平野のうち、かつての尾張と美濃の国境をなしている木曽川よりも東側の現愛知県側を、尾張平野と呼ぶ（図1）。濃尾平野の西側を南北に走る養老断層が沈降するため、木曽川の河口部は平野の西側に偏り、主に木曽川の土砂堆積によって形成される尾張平野も全体として西に傾く「東高西低」の地形である。現在の木曽川は、江戸時代初期に尾張藩による御堤によって固定された流路であり、それ以前には、犬山下流付近で現木曽川流路から分派した五条川、青木川、三宅川、日光川などが木曽川の分流であった。つまり、江戸時代初期に御

堤で分流の上流が完全に締め切られるまでは、尾張平野の中に複数の木曽川の分派川が流下していたことになる。戦国時代の尾張平野は、現在よりも多くの河川がいたる所に流れる風景であったことを想定できる。

木曽川の土砂堆積は犬山付近から下流で始まり、犬山から一宮・小牧・岩倉付近までに扇状地、一宮などから津島・清須付近までに自然堤防帯、それよりも下流に三角州（デルタ）という異なる傾斜と地質の地形を形成する。この地形区分の中でも、尾張平野で最も広い面積を占めるのが自然堤防帯である。自然堤防帯は、5kmで1m前後低くなる程度の緩い勾配で、木曽川の分流は各所で蛇行するのが特徴である。そのため、頻繁な氾濫によって肥沃な土壤が堆積するとともに、河川の周囲に多くの自然堤防と

呼ばれる微高地が形成される。尾張の守護・戦国大名が拠点を置いた城郭としては、下津・岩倉、清須、勝幡、犬山、小牧などが挙げられるが、これらの多くは自然堤防帯に立地する。それ以外の武士や村の有力者の城館も、尾張平野の中で特に自然堤防帯に多い。明治期の市や町のつく地名の分布をみて、やはり自然堤防帶に多い。これは、自然堤防帯の肥沃な土壤と多くの微高地が、古くから農業生産力の高さと村落の形成に結びつくとともに、勾配の緩さと河川の多さのえに隅々まで舟運が盛んで余剰生産物の売買や物や人の移動を可能にしたことから、自然堤防帯が戦国尾張の中心地域であったことを意味する。それに加えて、自然堤防帯を北西から南東に横断するように、戦国時代までの東海道が通過し、そこから分岐する複数の街道も存在していた。自然堤防帯における村落や城館、市・町の集中は、河川と街道を介した物流と人の交流を促し、下津・岩倉・清須・勝幡の城の周囲には城下町が発達した。さらに、河川と街道の交通機能によって、津島や萱津などには川湊を中心とする港町が作られた。このように、戦国尾張の主要都市は、尾張平野の河川

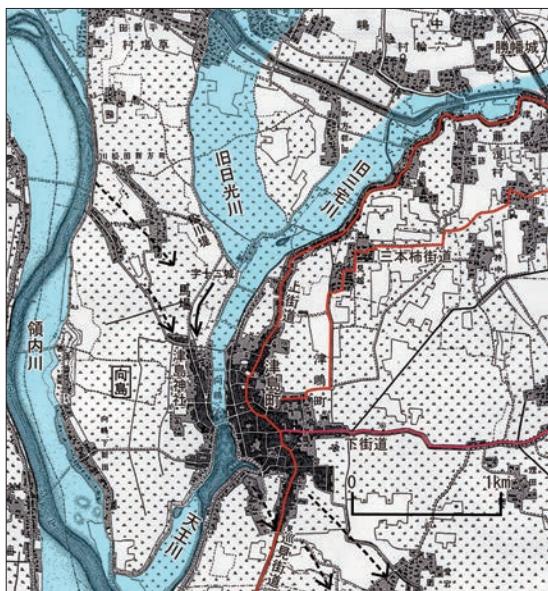


図2 津島の周辺環境
明治24年測図1:20000地形図に着色・加筆して筆者作成。

国大名の本拠となった清須である。津島と萱津と共に通するこのようないい立地条件が、中世港町の成立には好都合であったことがうかがえる。天王川の東側を併走する上街道は、中世東海道から分岐する街道であるが、天王川の堤防としても機能していた。上街道に沿って南北に緩くカーブしつつ津島の集落が立地していたが、これは天王川の緩く曲がる流路に平行する自然堤防の微高地に街道と集落が形成されたことを示す。このようないい立地条件が、中世港町の成立に大きく貢献したことがうかがえる。

十四・十五世紀の南北朝期・室町期に存在した寺社の分布を地図化する（図3）と、上街道と下街道の交差点よりも北側に多いことが分かる。それらの寺社の中には、上街道に直接、境内が面するものもあり、街道沿いの町並みの形成以前から存在したことがうかがえる。そのうちの一つである一三八一年創建の市神社（図3・★2、写真3）は米之座に立地するが、神社名と地名からそこで米市が開催され、中世の同業者集団である米座が存在したことを推定させたのだろう。南北朝期の元号である「明徳」の紀年銘のある墓石が残る大龍寺（図3・■1）も米之座の北端にある。このように戦国時代よりも古くから存在した寺社のあり方をうかがえると、天王川の船着き場も米之座か堤下にあったのだろう。津島神社の遷拝所が堤下の金燈籠社（図3・■3）であり、参道であるはずの天王橋よりも北側にあることは、本来の天王川の渡河点が古くからの集落の中心に近い北側の堤下にあったことを示唆している。

次に十六・十七世紀の戦国期・近世初期に存在した寺社の分布を地図化する（図4）と、一軒して南部に寺社が急激に増加したことが分かる。南部の筏場、今市場、中島の辺りは、もと

と強い関係を持ち、河川の作る自然環境を基盤として建設された点に特徴がある。それでは、具体的にどのような河川環境で、いかなる戦国都市が作られたのだろうか。自然堤防帯における尾張の主要な中世港町であった津島を例に挙げつつ、この問い合わせに接続する。

二 天王川と港町・津島

津島は、三宅川と日光川が合流した天王川に面した中世の港町である（図2）。三宅川、日光川はもちろん、天王川も、戦国期には現在見える以上に広かつたと考えられる。津島からは三宅川にも日光川にも遡上（さかじか）でき、尾張平野の玄関口となる立地であった。また、自然堤防帯の中でも最も下流で三角州との接点に位置し、河口も近いことから伊勢湾からの遡上も容易であり、海と川との交点でもあった。三宅川を遡上した場所には、信長を生んだ織田氏の一族が居城とした勝幡があり、津島は勝幡系織田氏の経済基盤ともなった外港でもあった。なお、津島と並んで中世尾張の港町として有名な萱津も、五条川と庄内川の合流点の下流で、自然堤防帯と三角州の接点に位置している。

五条川を遡上した場所が守護・戦国大名の本拠となった清須である。津島と萱津と共に通するこのようないい立地条件が、中世港町の成立には好都合であったことがうかがえる。天王川の東側を併走する上街道は、中世東海道から分岐する街道であるが、天王川の堤防としても機能していた。上街道に沿って南北に緩くカーブしつつ津島の集落が立地していたが、これは天王川の緩く曲がる流路に平行する自然堤防の微高地に街道と集落が形成されたことを示す。このようないい立地条件が、中世港町の成立に大きく貢献したことがうかがえる。

（写真1）は天王川の東側に広がる一方で、津島神社（写真2）とその社家町は天王川の西側にまとまっている。つまり、津島では天王川を挟んで都市と神社が対峙している。それでは、天王川東側の町並みは、戦国期を含む中世にどのようにして形成されてきたのだろうか。これを解く鍵は、津島の町を構成する米之座、堤下、筏場、今市場、中島の五つの地域ココニティにある。

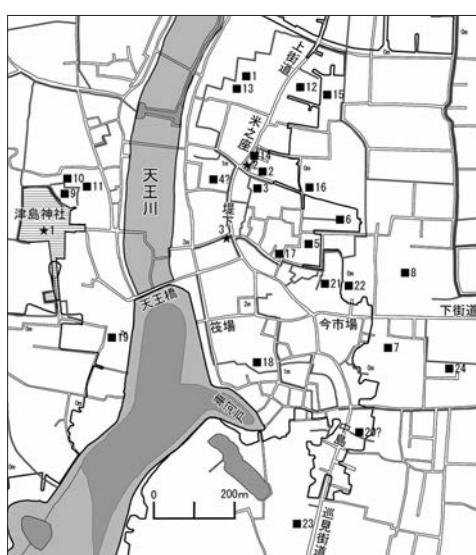


図3 14-15世紀の津島における寺社の分布
★は神社、■は寺院を示す。★・■の数字は、本稿末尾の参考文献表に挙げた山村亜希「中世津島の景観とその変遷」を参考のこと。筆者作成。

島の旧集落の背後は、天王川から遠ざかっているにも関わらず標高は低く、0m以下の後背湿地となっている。



写真1 上街道沿いの津島の町並み（筆者撮影）



写真2 津島神社（筆者撮影）

もとは旧河道や後背湿地が広がる低湿地であり、自然堤防の安定した微高地の上に立地する北側の米之座や堤下よりも居住条件が悪い地形であった。このような河川環境を逆手に取り、

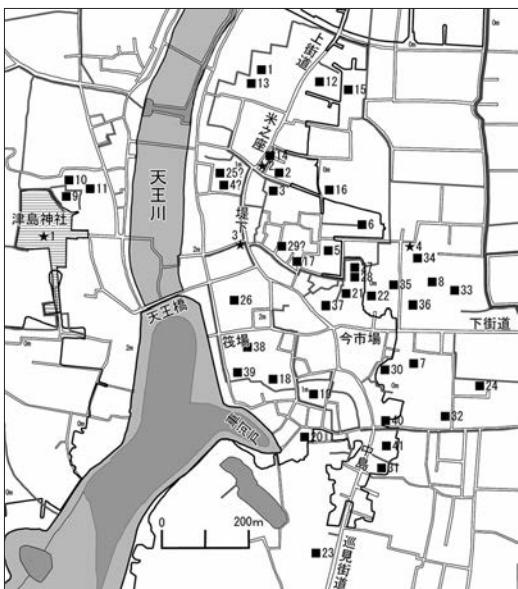


図4 16-17世紀の津島における寺社の分布
 ★は神社、■は寺院を示す。★・■の数字は、本稿末尾の参考文献表に挙げた山村亜希「中世津島の景観とその変遷」を参考のこと。筆者作成。



写真3 上街道に面する米之座の市神社（筆者撮影）

ではない、津長した有力事業の可能性は、従来の事業に対応した曲線や屈曲が自立つ不規則な街路網となる。一方で、人為的な街路・街区のかたちが全くと言つ

ていいほど見られない。戦国期に津島の川湊が南の車河戸に変更されたのは、新興商人の勃興とともに、天王川の土砂堆積が徐々に上流から進行するという河川環境の変化も理由であつ。戦国期になって都市の中心が南側にシフトするとい、それまでの津島神社への渡河点に代わつた。ようやく新たに架橋された。こうして、津島には古くから存在した米之座・堤下に、戦国期に新たに成立した筏場・

中世の港町津島は、自然堤防の複雑な微高地を巧妙に利用しつつ、変化しやすい河川環境に応じて、フレキシブルに町並みと都市の重心を変化させた点で、自然環境に調和的で流動的な都市であった。戦国期の港町の経済発展は、そこまで十分に利用されていなかつた低湿地の都市化を促し、そこに大規模な新港と不規則ながら高密度な街路網と街区を形成した。その一方で、神社を中心とする宗教空間と港町による都市空間が河川を挟んで対峙する。独特の構図は、変更されることはなかった。

間が河川を抜けて対岸にかかる
独特の構図は、変更される
ことはなかつた。

三、河川環境と
都市空間

間が河川を挟んで対峙する
独特の構図は、変更され
ることはなかった。

このようない河川と自然堤防に規定された流動的な戦国都市のあり方は、当時の尾張の「首都」であった清須（写真4）とも共通する。室町・戦国期の政治中心である守護所は、五条川沿いの下津、岩倉、清須に次々

に移転した。いずれも五条川の形成した大きな自然堤防と複数の旧河道が特徴の地形環境である点や、都市の頻繁な移動は津島に通じる。戦国期の清須城下町には、五条川の東側の安定した自然堤防に清須城と武家屋敷群、武士に付随する職人の市場や川湊があり、対岸の西側に中世東海道が通ると同時に、神社門前の河原市があつたと推定される。河川を挟んで武家の政治空間と町の経済空間が対峙する構図も、津島とよく似ている。

清須城は信長が小牧に居城を移した後も、尾張の中心城郭であり続け、江戸時代初めの一六〇年に名古屋に城が移されるまで、尾張の筆頭都市であり続けた。その最終形態は、五条川を挟んで両側に戦国期以来の武家地や町を基盤とする都市空間が広がり、一部で旧河道を利用した巨大な堀で城下町全体を囲い込むものであった。河川を挟んで両側に同等の都市空間が展開する城下町は、日本の^{数多}ある城下町の中でも特異であろう。このように近世初期の清須城下町が斬新な形態となったのは、河道と自然堤防に規定され、異なる性格の空間を河川越しに対峙させる尾張の戦国都市の特徴が、最後まで払拭されず、残り続けたためと考えられる。その結果、清須城下町は最終形に至っても、直線・方形の街路・街区は部分的にしか導入されず、江戸時代の統一的で整然とした城下町^{二層}からは遠いものとなつた。尾張で近世城下町らしい都市計画が施工されるためには、戦国期までの中心地域であった尾張平野の伝統的なオールドタウンから脱却し、全く異なる地形の台地・段丘を選んでニーコータウンを建設するしかなかつた。そこで選ばれたのが、一六一〇年に清須からの町人や寺社の大移動（清須越）によって、熱田台地の上に建設された名古屋城下町であった。

以上のように、戦国期から江戸時代初期にかけての都市の移り変わりは、尾張の河川環境と都市空間の関係を大きく変化させるもので

あつた。現代都市・名古屋は、このときは、尾張の伝統から脱却して選ばれた台地上の城下町の延長にある。安定した高台の上に明快な碁盤割の方形街区が施工された名古屋城下町は、それ以前の不安定な河川環境に規定されながらも、流動的で柔軟な対応を駆使した尾張らしい町づくりとは一線を画す、徳川政権による永続的な巨大都市の創出であった。現代において都市空間は、名古屋城下町のように、不安定で脆弱な自然環境を克服し、合理的で機能的な人工物として建設されるものなのかもしれない。一方で、自然環境と共生しながら流動的に存立した尾張平野の戦国都市には、人間社会と都市の関係性の認識从根本から問い合わせがある。



写真4 復元された清須城と五条川
(筆者撮影)

参考文献

『愛知県史 別編 自然』 二〇一〇年

『図説 名古屋圏』 名古屋大都市圏研究会編

『中世津島の景観とその変遷』 古今書院 一九八八年（第2版）

『愛知県立大学文学部論集』 日本文化学科

『信長と尾張の城下町』 小牧城下町成立前夜の尾張の都市』 山村亞希

『信長の城下町』 仁木宏・松尾信裕編 鈴木正貴

高志書院 二〇〇八年

「城下町の空間的多様性の理解に向けて」

—城下町の空間的多様性の理解に向けて
—尾張犬山を事例として— 山村亜希
『ふびと』71 二〇一〇年

赤池と大蛇（七宗町上麻生）

七宗町の飛水峡（ひすいきょう）ロックガーデン展望台付近から約五〇m上流の河原に、「赤池」という池があります。そばには「細尾谷（ほそひだに）」と呼ばれる谷川が飛騨川に流れ込んでいます。昔、この谷川の上流に大蛇が住んでおり、その通り道は木の根の皮が剥き取られるほどで、人々は恐れて近づきませんでした。この話を聞いた獵師の井戸五兵衛（いどごへえい）が、大蛇を退治すべく探しに出かけました。

探し回って歩き疲れた五兵衛が大きな倒木に腰掛け一服していると、体がかすかに動いたように感じました。不思議に思つて座つていた木を凝視すると、枯れ木と思つていたものが大蛇の胴体だったのです。五兵衛は仰天したもののすぐに冷静になり、狙いを定めて鉄砲を発射。大蛇の頭を撃ち抜いたかと思うと、大蛇は山鳴りがするほど叫び声をあげ、谷川の流れに飛び込みました。

その後、七日七夜（ななかねよ）、谷が赤く染まり、谷川の出口に溜まつた血は池となりました。それが「赤池」の由来だとか。一方、血で染まつた谷の光景の凄まじさに無我夢中で逃げ帰った五兵衛。その晩から高熱に苦しみ、息絶えてしまいました。



参考文献 『七宗町史 通史編』 七宗町
『広報ひちそう』 七宗町役場 一九九三年

現在、赤池には赤池龍神と赤池辨財天が祀られ、毎年五月に「赤池辨財天龍神祭」が盛大に開かれます。子供たちが山車を引いて地区を練り歩き、七宗町の春を彩ります。

ふね 船ちゃんのこぼれ話 第二十八話

「土木技術者の大地への思い」

時は幕末、のちに「長州ファイブ」と呼ばれる5人の青年が海を渡りました。海外渡航は禁じられ、その企てにより吉田松陰が投獄された、そんな頃です。この長州ファイブの面々は、近代日本の基礎を築くことになるのですが、その一人が井上勝です。

彼はロンドン大学で5年間、鉄道・鉱山などの近代土木を学びます。学業はもちろん、学費のためのアルバイト、暇を見つけては現場に赴き技術を学ぶ様子は、教授を感心させるばかりだったそうです。明治元（1868）年の帰国後は、政府の鉄道部門トップを長年務め、鉄道網の整備に生涯をささげたことより、現在「鉄道の父」と呼ばれています。

そんな井上は、明治21（1888）年の鉄道工事（現在のJR東北本線）の視察の際に、岩手山の裾野に広がる荒野を目にし「これまで鉄道敷設の事業に携わり、文明開化のためとはいえた多くの美田良園（美しい田や良い畠）を潰してきた。このような荒蕪地（荒地）が、しかも官有で手をつけられることなく放置されているのならば、開墾し農牧の用に供しその埋合せをしたい。それは国家公共のためで、自分にふさわしい事業ではないか」というような思いを抱いたと伝えられています。この構想は、日本鉄道副社長の小野義眞（「よしづね」とも）の計らいと、三菱の2代目総帥・岩崎彌之助の出資により動き出し、小野・岩崎・井上の頭文字をとって「小岩井農場」と命名されました。ちなみに小野は、明治7（1874）年まで土木官僚として、オランダ人技師のデ・レイケやエッシャーらと共に、近代的な大阪港の整備や淀川改修に携わりました。

明治24（1891）年、農場は井上を場主としてスタートしますが、大地は瘦せ「岩手廩」と呼ばれる強烈な風が吹く過酷な環境でした。そのため初期の経営は厳しく、牧場経営に精通していた宮内省の人物に相談し、岩崎家に再建計画を提案する形で、井上は経営からは退きますが、晩年まで何度も農場を訪れその成長を見守り続けました。

現在の農場は、緑豊かな大地に成長し、岩手県有数の観光地となり、「小岩井」の名を冠した乳製品は全国で広く販売されています。そして、船頭平闡門と同じ頃に造られた「天然冷蔵庫（写真1）」という施設もあります。バター等の貯蔵庫として、小山を掘った中に煉瓦で造った施設で、一年を通して10°C程に保たれているそうです。冷蔵庫を含めた21の施設（第一号サイロ（写真2）など）が、重要文化財に指定され、場内で大切に保存されています。

幕末に近代土木を学んだ「土木技術者の大地への思い」がきっかけとなり、多くの人々によって育まれた農場を、ぜひ『列車』で訪ねてみてはいかがでしょうか。



写真1 天然冷蔵庫（明治38年建造）
<写真提供：公益財団法人 小岩井農場財団>



写真2 第一号サイロ（明治40年建造）
サイロは、牧草などを発酵させるための施設。煉瓦造・日本の現存最古のサイロ。
<写真提供：同上>

表紙写真 『雪景色の飛水峡』 <提供：七宗町>

飛水峡は七宗町から白川町にかけて約12km続く峡谷です。両岸に飛騨川の激流によりできた甌穴群があり、国の天然記念物に指定されています。6月頃、岩ツツジが淡い紅色の花を咲かせます。飛騨川流域・木曽川中流域に広がる飛騨木曽川国定公園の見所の一つです。

『KISSO』 Vol.137 令和8年1月発行

編集 木曽三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

発行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL (0594) 24-5711 ホームページ URL <https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>



『KISSO』
ホームページは
こちらから

編集後記

『KISSO』は、創刊号からのすべての号が、木曽川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。
『KISSO』ホームページ URL <https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>